

『今月の天候と農作業』

通巻第5649号

3月号

令和3年2月25日発行

宮崎県

宮崎地方気象台



【特に注意を要する事項】

期間の前半は気温がかなり高くなる見込みです。

【予報のポイント】

暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高いでしょう。特に、期間の前半は気温がかなり高くなる見込みです。

低気圧の影響を受けやすいため、向こう1か月の降水量は平年並か多く、日照時間は少ないでしょう。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	10	20	70
降水量	九州南部	20	40	40
日照時間	九州南部	50	30	20

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天候：天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

気温：平均気温は、高い確率70%です。

降水量：降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。

日照時間：日照時間は、少ない確率50%です。

<1 週目の予報> 2月27日(土)～ 3月5日(金)

前線や湿った空気の影響で曇りや雨の日が多いでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、

週間天気予報(<http://www.jma.go.jp/jp/week/>)を参照してください。

<2 週目の予報> 3月6日(土)～ 3月12日(金)

天気は数日の周期で変わりますが、低気圧の影響を受けやすいため、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

<3 週目から 4 週目の予報> 3月13日(土)～ 3月26日(金)

天気は数日の周期で変わりますが、低気圧の影響を受けやすいため、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

普通作物

◆早期水稲

1 育苗管理

長期予報で気温が平年並みからやや高いと出ており、ハウスの温度と灌水に注意が必要です。緑化時期の温度は、日中は25度まで、夜温は15度を確保します。硬化時期は、日中は20℃、夜間は10℃で管理し、田植え7日前頃から外気に慣らしします。温度が高いと徒長しやすく、急激な温度変化で低温に遭うとムレ苗が発生しやすくなるため、気象情報に注意し、温度管理を行います。かん水は午後に行うと床土の温度が下がり多湿となるため、午前中に行います

2 本田準備

ほ場の漏水が激しいと水温が上がりにくく、肥料や除草剤の効果も不安定となります。畦を補修し、代掻きは丁寧に行います。代掻きは除草剤の効果安定させるため、均平にすることも重要です。基肥は施肥時期が早過ぎると成分が流亡するため、できるだけ代掻き頃に施用します。

3 病害虫防除

いもち病対策として田植前か田植同時に薬剤箱処理を行います。箱施薬剤と除草剤を間違えないよう注意します。

気温が高いとジャンボタニシの活動開始が早くなるため、防除が遅れないよう注意します。

4 移植作業と除草剤散布

寒波時は無理に移植せず日延べします。早期水稲では有効茎（穂数）、が不足しやすいため、極端な疎植は避けます。移植後は深水とし植傷みを軽減します。霜の予報が出た際も深水で防寒します。

除草剤は、ラベルの使用時期や使用方法を熟読して適切に散布し、散布後7日間は落水しません。軟弱苗や漏水田、強風時の散布、浅水で拡散が不十分な場合は薬害が発生しやすくなります。

◆麦 類

1 排水対策と病害虫防除

雨が多くなるため、周囲や畦間に排水溝を設けます。

赤かび病の防除は、裸麦・小麦では穂揃期に、大麦では穂揃い期から7～10日後（蒴殻抽出期）に実施し、天候を踏まえその7日後頃にも行います。気温が高く生育が早いほ場が多いため、適期の防除に注意します。

(荒砂 英人)

施設野菜

◆共通事項

蒸散量が多くなるため、日射量の増加に応じてかん水量を増やしていきませんが、かん水間隔を短くし、回数を増やすことで全体のかん水量を増やすようにします。

日中は、内カーテンなどを活用して日射量を調節し、十分な換気を行い、ハウス内の温度が高くないように注意します。

夜温が高い場合は、内カーテンを開放し、加温機の運転や循環扇による送風で葉や果実の結露を防止します。

◆きゅうり

蒸散量が増加すると、葉の老化が進み、草勢が低下しやすくなります。高温乾燥が原因なので内ビニールなどを活用し、日射を弱めて湿度を確保します。高温になると果形も乱れやすくなるため、十分な換気に努めます。

また、収穫位置が上昇しやすい西側のハウスが日中に高温である時はサイド面に黒マルチなどで遮光を行い、生育を調整しましょう。

◆ピーマン

ハウス内が高温になると授粉がうまく行われず、奇形果の発生や果実の肥大不良による赤果等の発生につながります。十分な換気を行い、ハウス内が高温多湿にならないように管理します。

気温の上昇とともに収穫までの日数も短くなるため、最低でも3～4日間隔での収穫を心がけ、草勢維持に努めます。混み合っている枝を整理し、光線が中まで入るように整枝・剪定を行い、白果の発生を防止します。

◆トマト

ミニトマトは、気温上昇に伴い裂果が増加します。土壌水分の急激な変化が裂果の主な原因のため、こまめに少量多回数のかん水を行います。

トマトは、高温で乾燥すると尻腐果が発生しやすくなるのでかん水量を増やしていきます。

◆いちご

温度は、出来る限り生育適温に近づけ、低温管理を心がけます。ハダニ類が多く発生しているため、薬剤が均一に付着するよう、古葉や収穫の終わった果梗の除去はこまめに行い、定期的な薬剤散布を行います。

(吉山 健二)

葉茎根菜類・いも類

◆さといもやかんしょなどほ場の準備

各種病害の伝染環を絶つため、作付前には土壌消毒を行います。残さが残っている場合は消毒剤が効きません。ほ場に残っている残さは可能な限りほ場外に持ち出し、腐熟させます。ほ場外に持ち出せない残さはトラクター耕耘を多めに行い細かく破碎します。冬場は残渣分解が進まず、春先に地温が15℃以上になって残渣分解が進むため、残渣分解後に土壌消毒をします。畑や水路近くに残さを放置すると、伝染源になる恐れがあるため、放置しないようにします。無発病の畑や種芋採取用の畑、育苗ハウスに入る時は、長靴や農機具を洗浄して使います。

◆さといも疫病の重要対策

早生種の定植期です。さといもは連作障害が発生するため4年以上作付けをしていないほ場を選び、センチュウ消毒を行います。また、さといもの疫病対策では、葉柄にも薬剤をかける必要があるため、植付け時には作業管理通路を10メートル間隔で作っておきます。

種いもは病害虫のあるもの、芽つぶれのあるものは確実に除き、センチュウや黒斑病の消毒を行い

ます。薬剤消毒は種いもの表面にしっかり届くよう、土を洗い落としてから行います。その際、水に浮く芋は種芋として使用しません。種芋は大きき順（30～50g程度）に植付けます。

◆食用かんしょ

トンネル栽培では、換気作業を徹底します。苗床では温度管理を徹底し、気温の高い日は外気にさらして徒長を防ぎます。

育苗中に葉の萎縮・変色、地際部からの茎の枯れや黒変、芋の腐敗が発生したら速やかに撤去します。撤去の際、他の苗との接触を避けるため撤去する苗のそばまで肥料袋などを寄せ、袋に入れ込みます。苗を切り取る高さは地際から5センチ以上離し、切り取った苗は速やかに病害防止のため薬剤処理をします。調整後の薬剤は日光や汚れなどで分解しやすいため、一日を目安に使い切ります。

（川崎 佳栄）

果樹

1 常緑果樹

◆かんきつ全般

樹勢強化や新梢・花芽の充実のために春肥を施用します。春肥の吸収効率を高めるためには、速効性の肥料を萌芽直前に施用するのが最も効果的です。今年は発芽や開花が平年よりもやや早い見込みです。時期を逃さないように早めに準備します。

◆完熟きんかん

収穫が終了したら、剪定の時期です。枝が隣の樹に当たり始めたら、まず縮間伐を行います。剪定は樹勢や樹齢を考慮し、間引き剪定を基本に、バランス良く枝を配置します。剪定の遅れは、枝の充実を遅らせ、一番花の結果を悪くするため、3月末までに終わらせます。

◆日向夏

3月に入ると露地日向夏の収穫が始まります。減酸の早い早生日向夏から収穫を開始し、在来系の日向夏は減酸を確認してから収穫します。

今年は寒波の影響で、す上がり果の発生が確認されています。袋掛けをしていない果実や、園地の中で特に冷気が溜まりやすい場所で樹冠表面に結果している果実には注意が必要です。果実の大きさに対して極端に重さが軽い場合には、中身を確認してみましょう。

◆マンゴー

今年の早期出荷作型の生育は、平年と比べるとやや遅いですが、出荷は平年並を見込んでいます。3月になると、次第に日射が強くなり、日焼け果が発生することがあります。カーテンや遮光ネットを利用し、日焼けを防止します。

後期出荷作型でこれから開花を迎える園では、早朝換気や夜間の十分な加温によって湿度を低く保ち、花の時期から病気の発生を抑制します。

2 落葉果樹

◆梅

今年は気温が高く推移している影響で、生育が早まっています。開花期～展葉期にかけては病害虫が一斉に発生しますので、予防や初期防除を徹底します。

(鈴木 美里)

花き

◆夏秋ギク

6～7月出荷作型の定植時期となります。挿し穂は無病で充実した揃いの良いものを晴天時の午後採穂します。

6月出荷作型の「フローラル優香」は、消灯前後を問わず生育期間全般で低温に遭遇すると貫生花が発生しやすくなりますので、電照期間中から温度を確保するように努めます。

「精の一世」は、親株時の低温遭遇によって幼若性を獲得している場合がありますので、定植後から夜温13℃以上で加温を行います。

◆スイートピー

3月に入ると気温が上昇し、天候も不安定になることから、草勢が急速に低下しやすくなりますので、こまめな施肥やかん水により草勢の維持に努めます。なお、株へのストレスが大きくなりますので、高濃度の液肥の施用は避けます。

また、結露による花シミや灰色かび病の発生リスクが高まりますので、循環扇の活用や微生物農薬のダクト散布とともに、換気除湿や早朝加温など湿度低減対策を行います。

◆デルフィニウム

3月は気温の上昇にともなって茎が軟弱になりやすいことから、日中の換気を十分に行うとともに、必要に応じて葉面散布等による追肥を行ってボリュームの維持に努めます。

◆ホオズキ

8月出荷作型の植え付け期となります。萌芽時の生長点の焼けを防ぐため、マルチの穴あけは遅れないように行います。

また、気温の上昇に伴い、ハウス内への害虫の侵入も多くなりますので、防虫ネットの設置やほ場周辺の防除は早めに行います。

◆ラナンキュラス

3月に入ると気温が上昇し、開花速度が速くなります。気温に応じて切り前を調節します。また、花シミや灰色かび病の発生を防止するために循環扇の活用や微生物農薬のダクト散布を継続して行います。

畜産

◆家畜防疫対策

令和3年2月18日時点で、鳥インフルエンザが県内7市町で11例の発生があり、国内でも関東、西日本の17県で50例が発生しています。また、県内に飛来する野鳥の糞便からもウイルスが摘発され、鹿児島大学の調査では、環境中のウイルス量は例年の数倍、去年の七倍と多くなっており、野鳥が営巣地に帰る4月までは、養鶏場への侵入リスクが高い状況が続きます。また、その他の家畜伝染病についても、適切な気温・湿度環境になるまでは、ウイルスが伝染しやすい気象条件が続きます。これらの伝染病から、農場を守るため、畜舎内外の消毒はもとより、人・車両・物資の消毒と野生動物等の侵入防止対策を徹底し、農場にウイルスを侵入させないように、飼養衛生管理基準に基づく侵入防止対策の徹底を図ります。

◆家畜

今月は、外気温の日較差が大きくなり、家畜や家禽の免疫力が低下し、呼吸器病等の感染症が発生しやすい時期となります。

このため、朝夕の畜舎カーテンの開閉や舎内温度が上昇する昼間は、換気扇による換気、細霧による湿度管理等を行い、舎内の温湿度環境を整えます。また、病気の発生時は早期対処ができるように、家畜の健康状態の観察を徹底します。

(三角 久志)

特用作物

◆茶

1 春整枝

春整枝は、2月下旬～3月上旬の平均気温が10℃となる頃を目安に実施します。整枝の高さは、葉層を8センチ程確保できるように、去年の最終摘採面から3～5節程上げた位置とします。

また、秋整枝を実施した茶園では、越冬芽に掛からない高さで丁寧に整枝します。但し、越冬芽の寒害(芽つぶれ)が多発している場合は、1～2節程度刈り落とす対応を行います。

2 芽出し肥の施用

芽出し肥は、一番茶摘採の25日前までに硫安等の速効性肥料を施与します。各地域の施肥基準に準じ、うね間だけでなく雨落ち部まで幅広く施与します。施与後は、流亡防止と分解促進のためうね間を軽く攪拌します。

3 防霜対策

防霜を開始する時期は、秋整枝した茶園では一番茶萌芽の15日前から、春整した茶園では春整枝直後からとし、いずれも一番茶の摘採が終了するまで実施します。防霜ファンの設定温度は、萌芽期前後は3℃、一～二葉期は5℃、二葉期以降は7℃とします。

スプリンクラーで防霜する場合は、摘採面の気温が萌芽期前後は0℃、一～二葉期は1℃、二葉期以降は2℃となったら散水を開始するようにします。

4 カンザワハダニの防除

カンザワハダニの防除適期は、産卵を開始する気温10℃となる2月下旬～3月上旬頃です。春整枝と裾刈り後は、速やかに地区の暦に準じ、裾部や葉裏へ薬液が十分にかかるよう散布します。

5 定植

露地で育苗した苗の定植は、2月下旬～3月中旬が適期です。ハウス等の施設内で育苗した苗は、定植後の極端な低温を避けるため、一番茶前（4月）の定植が適切です。

（松尾啓史）

◆しいたけ

一 採取

発生したシイタケは、目標の品柄に応じて適期に採取します。

雨子での採取は、乾燥に時間がかかる上、品質低下の原因になるため、なるべく晴天を選んで採取します。また、ほだ木の表面を傷めないように丁寧に採取します。

採取容器は通気性が良く、浅いもの（専用の採取カゴ等）を使い、ヒダに触れないよう柄を上にして入れます。採取後は、振動を少なくして、できるだけ早く乾燥場に運び、エビラなどに広げて品質の低下を防ぐため、速やかに乾燥します。特に雨子は素早く処理します。

二 乾燥

高温での急激な乾燥は品質の低下を招きます。乾燥初期は低めの温度設定とし、乾燥機内の温・湿度や換気に注意しながら徐々に温度を上げます。

（古澤 英生）

◆たばこ

品質・収量の確保に向けて適期・適切に健苗の移植に努めます。

- 1 移植は、葉数が9～10枚（米粒大の心葉まで含めた枚数）の白い根が肥土全体に覆っている根張りの良い苗を選んで行います。

葉数が少ない小苗を移植すると、本畑での活着と生長が遅くなり、また大苗では、本畑初期の低温による不時発蕾を生じやすくなります。

植穴は、直径10～13センチ、深さ13～15センチ程度に揃えます。

極端な深植え、浅植えは、初期生育が遅れ、不揃いの要因となります。

また、移植の際は、抱土が露出しないよう注意します。抱土が露出していると乾燥し、根の伸張が悪く、活着が遅れ、不揃いの要因となります。移植後は、移植苗の確認手直しを行い、活着促進に努めます。

- 2 移植後の管理作業として、排水溝の完備を徹底し、生育不良、病害発生防止に努めます。

マルチ片の回収袋を設置し植付け穴のちぎれそうなマルチ、ほ地内に飛散しているマルチ片を回収します。

ドリフト（農薬飛散）対策として、他作物が隣接する場合は、周辺農家との話し合いを行い、障壁物の設置やのぼり旗の設置等を行います。

アブラムシの飛来に備え、防虫ネットの設置や共同防除を行い、黄斑えそ病やキュウリモザイク病の発生防止に努めます。

（宮崎県たばこ耕作組合）

内容の詳細について

3月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県農業経営支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病虫害の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ。

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

向こう1カ月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

農作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
早期水稲	いもち病	—	育苗時の発生の有無に関わらず、移植時の箱施薬を徹底します。
	スクミリンゴガイ	—	越冬場所である水田土壌表層部を細かく耕耘して殺貝します。この場合、土壌は硬く、耕耘ピッチは小さいほど効果が高くなります。貝の生息量が多い場合には、防除薬剤の本田施用を実施します。
施設野菜類	病害全般	—	天候の変化には細心の注意を払い、施設内の温湿度管理を徹底するとともに早期防除に努めます。 また、夜温が高めの加温機が稼働しない日は、施設内が多湿になり、病害の発生が助長される傾向があるので特に注意が必要です。
冬春きゅうり	うどんこ病 べと病 灰色かび病 褐斑病	並 並 並 少	発生が多いハウスでは、1週間間隔で複数回の連続防除を実施します。また、薬剤の感受性低下（耐性菌の出現）を防ぐため、異なる系統の薬剤を用い、ローテーション散布を行います。
	黄化えそ病 (MYSV) ミナミキイロアザミウマ	やや少 少	黄化えそ病の感染株を確認した場合は、速やかに抜き取り、ビニール袋等に入れて完全に枯れるまで密封処理します。 また、黄化えそ病を媒介するミナミキイロアザミウマは、発生初期に防除するとともに、卵と蛹には薬剤が付着しにくいので、最少でも7日間隔で3回の連続した防除を行います。
	病害虫全般(改植時の留意点)	—	ウイルス媒介虫でもあるアザミウマ類、コナジラミ類などに対して、抜根する前の防除を徹底し、抜根後は少なくとも20日間は蒸し込みます。次作の定植時に薬剤を施用し、防除を徹底します。
冬春ピーマン	うどんこ病 斑点病 黒枯病	やや多 並 並	うどんこ病は乾燥、斑点病・黒枯病は多湿条件で発生しやすいので、ハウス内の適正な温湿度管理、排水対策等を徹底します。また、発病葉は伝染源になるため、適宜除去し園外に持ち出します。
	ミナミキイロアザミウマ ヒラズハナアザミウマ タバココナジラミ	やや少 多 やや多	いずれの害虫とも、今後、暖くなるにつれて増殖速度が速くなります。特にアザミウマ類の発生が多いハウスでは、最少でも7日間隔で3回の連続的な薬剤散布を行い、防除を徹底します。
冬春トマト	葉かび病 すすかび病 灰色かび病 タバココナジラミ	並 並 並 やや多	葉かび病、すすかび病、灰色かび病は多湿条件で発生しやすいので、施設内が過湿にならないよう換気に努めます。 トマト黄化葉巻病を媒介するタバココナジラミは、今後、気温の上昇とともに活動が活発になるため、低密度のうちに防除を徹底します。
冬春いちご	うどんこ病 炭疽病 ハダニ類 アブラムシ類 ヒラズハナアザミウマ	並 並 やや少 やや多 やや多	いずれの病害虫も多発してからでは根絶は困難なので、低密度のうちに定期的な防除を行います。 ハダニ類は、複数の殺ダニ剤に抵抗性をもつ個体群がいるので、物理的に窒息死させる気門封鎖剤を防除体系に組み込みます。 ヒラズハナアザミウマは寄生花率10%以上で被害果が発生する恐れがあります。低密度時に防除を徹底します。
カンキツ (露地栽培)	そうか病 かいよう病 ミカンハダニ	並 並 やや少	いずれの病害も越冬病斑は伝染源になるので、発見したら直ちに剪除します。そうか病は、春葉での感染が多いと開花後果実への感染を抑えることは難しいので、発芽初期の防除は必ず行います。 生息密度が高いほ場や冬季マシン油乳剤を散布できなかったほ場では、春季(3月上中旬、萌芽前)にマシン油乳剤による防除を行います。
茶	カンザワハダニ	並	防除適期は、増殖が始まる前の密度の低い時期(～3月中旬)です。株の内部やすそ部の葉裏に多く生息しているので、十分に薬液が到達するよう丁寧に防除します。

1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるかを予測したものです。

2) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページは、<http://www.jpnp.ne.jp/miyazaki> です。

